

弥生時代中期の複合口縁壺について

林 大智・河合 忍

はじめに

ことの発端は2月後半、新潟県の調査員から金沢市戸水B遺跡等の土器を見たいという話があり、土器を準備していた際に、林が戸水B遺跡出土土器のコンテナの中に見慣れない白い土器を見つけたことに始まる。それは北陸ではあまり見慣れないタイプの壺形土器（以下「形土器」を省略）の口縁部破片であった。調べてみると、それは石川県教育委員会が刊行した戸水B遺跡（1次調査）の報告書に掲載されているものであった（第12図21⁽¹⁾）。何回もこの報告書を見ていたつもりではあったが、見過ごしていた理由の一つとして、実測図の土器の傾きが少々間違っていたことがあった。図を修正したものが第2図1である。頸部より口縁部下端まではゆるやかに外湾し、そこから口縁端面までは内湾気味に立ち上がる形態を持つものである。このような形態を有する壺に見覚えがあった筆者は同じ時期の土器が出ている報告書を調べてみた。すると、似たような土器は戸水B遺跡に隣接する藤江C遺跡や犀川を越えて南側に所在する金沢市専光寺養魚場遺跡にあった。北加賀にある程度まとまりをもって存在することが予想できた。しかし、調査を進めてみると、この土器が主に分布する地域は九州～西部瀬戸内であることがわかってきた。

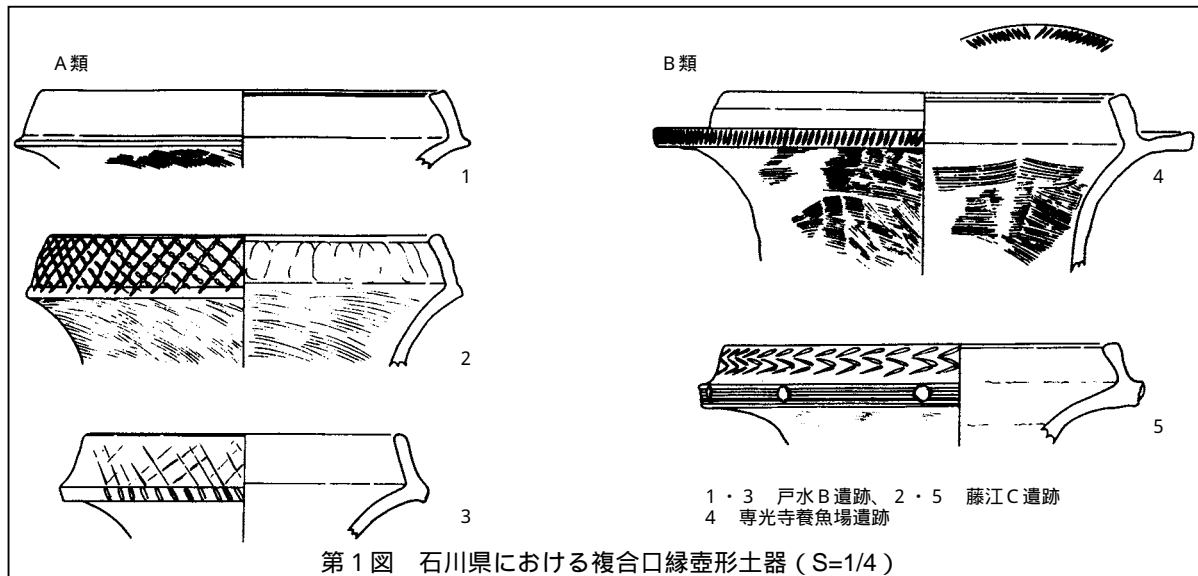
本稿はこの特徴的な口縁部形態を有し、かつ分布が捉えやすい複合口縁を持つ壺に焦点を当て、若干の考察を行い、そこから派生する問題を整理し、提起することを目標としたものである。

本稿における一連の作業等は全て林と河合が協力して行い、河合が執筆・構成を行った。本稿に関する文責は全て河合にあることをまず断っておきたい。

北陸における複合口縁壺

まず、北陸における複合口縁壺について調べてみた。今のところ、全て北加賀（金沢市）からの出土であり、合計6点を確認することができた。

第1図はそのうち5点を図示したものである。順に説明を行いたい。第1図1は戸水B遺跡（第1次）出土遺物であり、2号土坑と3号溝が切り合った遺構から出土している。どちらの遺構に帰属するものかは不明である。前章において簡単に説明した土器である。法量・調整等を補足しておきたい。口径は20.8cmを測る。口縁端部は面を持ち、やや中央が凹む。口縁部下端は横方向に突出する。口縁部内外面は共に、ヨコハケ調整後にヨコナデ調整を行っている。口頸部外面は斜め方向にハケ調整、内面はヨコナデ調整をそれぞれ行っている。内面口縁部下端には口縁部を接合する際にハケ状工具を用いた痕跡が残し、凹んでいる。灰白色を呈し、焼成は極めて良好である。第1図2は藤江C遺跡（第2次）出土遺物であり、河跡の第2層から出土している。口径は20.8cmを測る。調整や形態・作り方はほぼ1と共通する。相違点を挙げておきたい。口縁部形態は面取りを行わず、丸く仕上げる。口頸部内面は斜め方向にハケ調整を行う。口縁部内面および口縁下端内面には指押さえの痕跡が残る。後者は1におけるハケ調整が指押さえに置き換わったものと判断できる。さらに口縁部外面にはヨコナデ調整後にハケ状調整具を用いて斜格子文を施している。色調は戸水B遺跡や藤江C遺跡近辺に多く見ることができるにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。第1図3は戸水B遺跡（第3次）出土遺物であり⁽²⁾、35P（35号ピット）から出土している。口径は17cmを測る。1・2と同様に、頸部より口縁部下端まではゆるやかに外湾し、そこから口縁端面までは内湾気味に立ち上がる形態を有



する。口縁端部は丸くおさめる。調整は内外面共に摩耗が著しく、不明である。口縁部外面にはヘラ状工具を用いて斜格子文を施し、口縁下部外面にはハケ状工具を用いて刻目文を施している。にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。第1図4は専光寺養魚場遺跡出土遺物であり、S D02 (2号溝) から出土している。口径は21cmを測る。大きく外反する口縁部 (第1次) をもち、口縁部内面からさらに斜め方向に直立した口縁部 (第2次) を呈する。いわゆる「つば」が付く土器である。口頸部内外面にはヨコハケを施し、第1次口縁部内面および第2次口縁部内外面にはヨコナデ調整を行う。口縁端部は両方共に面取りを行い、ハケ状工具を用いて刻目文を施している。黄橙褐色を呈し、焼成は良好である。第1図5は藤江C遺跡 (第1次) 出土遺物であり⁽³⁾、河跡から出土している。口径は20.8cmを測る。4と同様に、大きく外反する口縁部 (第1次) をもち、口縁部内面からさらに斜め方向に直立した口縁部 (第2次) を呈するものである。内外面共に摩耗が著しいが、おそらく調整も4と同様であると考えられる。第1次口縁部端部には面取りを行った後に3条の凹線文を施し、その上から円形浮文を等間隔に8つ程貼り付ける。第2次口縁外面にはハケ状工具を用いて、綾杉文を施している。にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや不良である。その他にここでは掲載していないものの、金沢市上安原遺跡にも上記の4・5に類する口縁を有する完形に近い壺が出土しているのを確認している⁽⁴⁾。上安原例は口径23.2cm、頸部径15.4cm、胴部径36.7cm、底部径10.6cm、器高60.7cm、容量24.6^{リットル}⁽⁵⁾をそれぞれ測り、かなりの大型品である。上記の1～5も口径から類推すると大型品になるものと推測できる⁽⁶⁾。いずれも中期後半 (北陸第 様式) に編年される⁽⁷⁾土器と共伴しているものである。

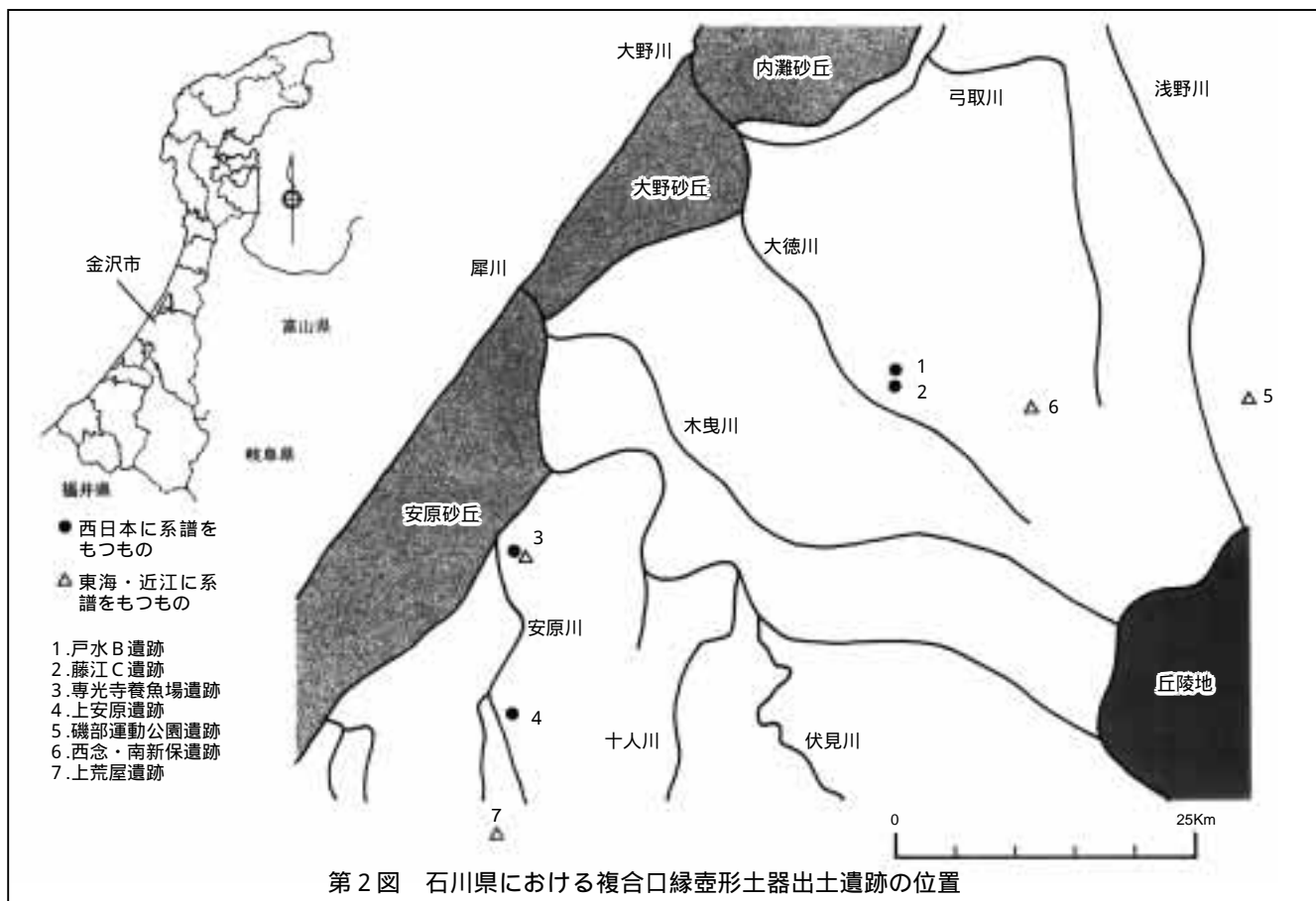
複合口縁壺の分類

以上の複合口縁壺は、その口縁部形態から大きく2つに分けることができる。

A類：第1図1～3が相当する。頸部より口縁部下端まではゆるやかに外反し、そこから口縁端面までは内湾気味に立ち上がる形態を有するものである。

B類：第1図4・5、上安原遺跡出土例が相当する。いわゆる「つば」がつく土器であり、大きく外反する口縁部 (第1次) と口縁部内面からさらに斜め方向に直立した口縁部 (第2次) をもつものである。

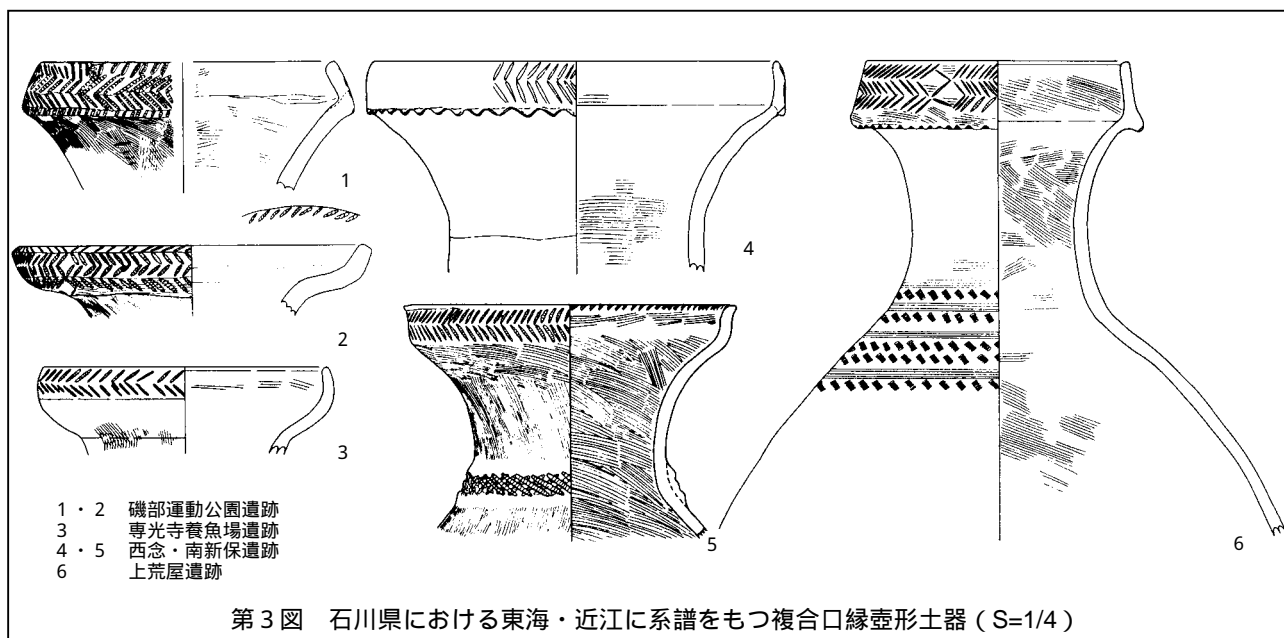
さらに文様の有無で細分できると考えているが、ここでは細分しない。



複合口縁壺の系譜

この複合口縁壺はカタチこそ九州～西部瀬戸内の壺に似ているが他人のそら似であるかもしれない。この土器の系譜を明らかにするためにはやはり、その土地の人に見ていただくのが確実な方法である。幸い私たちは2月末に福岡県甘木市で行われた第45回埋蔵文化財研究集会（九阪研究会）に参加する機会を得たので、これらの複合口縁壺もついでに持っていくこととした。研究会の休憩時間の合間を縫って、近畿から九州で埋蔵文化財に携わっている方々に見ていただくこととした。林が以前より知り合いであった愛媛県松山市の梅木さんにまず見てもらい、その梅木さんが知り合いの土器に詳しい研究者の人たちを次々に紹介して下さり、廊下は見ると見るうちに人だかりになった。愛媛県の柴田さん、愛媛大学の吉田さん、兵庫県芦屋市の森岡さん、大阪府寝屋川市の濱田さん、福岡大学の武末さん、福岡市の吉留さん・久住さん、島根県の中川さん、覚えているだけでもこれだけ沢山の方々、実際はさらにもう何人かの人たちにいろいろと教えていただくことができた。

みなさんの検討の結果としては、B類はよくわからないが、A類は西部瀬戸内～九州のものによく似ており、その形態や調整法からみて九州ではなく、西部瀬戸内のものと類似するということであった。近畿にはまず見られないものであり、山陰にはまれに見られるものであることも教えていただいた。西部瀬戸内といっても、愛媛・広島・山口県があるが、どちらかといえば、山口県のものに近いのではないかと教えていただいた。たまたま教えていただいた人のなかに山口県の人がいなかったため、確証は得られなかったものの、これらの土器の系譜についておおよその見当を付けることができた。しかし、大きな問題があった。それは時期の問題である。北陸で出土したものはその全てが中期後半に編年されている土器と共伴しているものであるが、西日本で出土しているものは、そのほとんどが後期中葉以降に編年されているものであり、両者の間には大きな隔りがある。これについてはいろいろな可能性が考えられるのであるが、次項以降で検討することにしたい。



別系譜の複合口縁壺

中期後半の北陸にはさきほどから話題に挙がっている複合口縁壺のほかに、別系譜の複合口縁壺がある。この別系譜の土器とは筆者がかつて壺A類として報告した⁽⁸⁾、東海地方を中心として分布する条痕文系土器の系譜を引く壺である。類似した土器は近江にも確認できるため、ここではひとまず東海・近江に系譜をもつ土器として扱っている⁽⁹⁾。

先程の研究会で土器を見ていただいた際に、この系譜の土器との関係はどうかとの声があったため、ここで紹介しておきたい。第3図は石川県内の中期後半に属する事例の集成である。第3図6が中期中葉にさかのぼる可能性を残すほかは中期後半の古い段階に属するものであり、第3図3がもっとも新しい事例である。これらについて若干の説明を行いたい。ラッパ状に開く頸部をもち、口縁部は直立するか、やや内傾する形態をもつ。古い形態を残す第3図4・6は口縁部外面の下部に突帯を貼り付け、指やハケ状工具で刻むが、新しくなるにつれ、突帯の貼り付けがなくなり、口縁下部の刻みもなくなっていく。口縁部外面にはハケ状工具を用いて、綾杉状刻みを施す。口縁部の下部形態は新しくなるにつれ、丸みを帯びていく傾向がある。

これらの土器と第1図の複合口縁壺は形態等において大きく異なると考えざるを得ないものであり、第1図の複合口縁壺の系譜が東海・近江に追えないことが明らかである。滋賀県栗東町の近藤さんや愛知県の宮腰さんにも第1図の土器を見ていただいたが、どちらもこのような土器を見たことがないとのことであり、この考えを補強する意見をいただくことができた。

問題点の整理と今後の展望

本稿で主に問題として扱ってきた土器は、中期中葉以前から北陸に存在する複合口縁壺の系譜として捉えることができるものではなく、中期後半以降に新たに出現する形式のものであることが明らかとなった。その詳しい系譜等について、A類については調査の結果、西部瀬戸内、中でも山口県周辺地域の可能性が強いと判断したが⁽¹⁰⁾、北陸と西部瀬戸内とでは時期が違うという大きな問題が存在することも明らかとなった。また、B類についてははっきりした情報を得ることができなかった。そこ

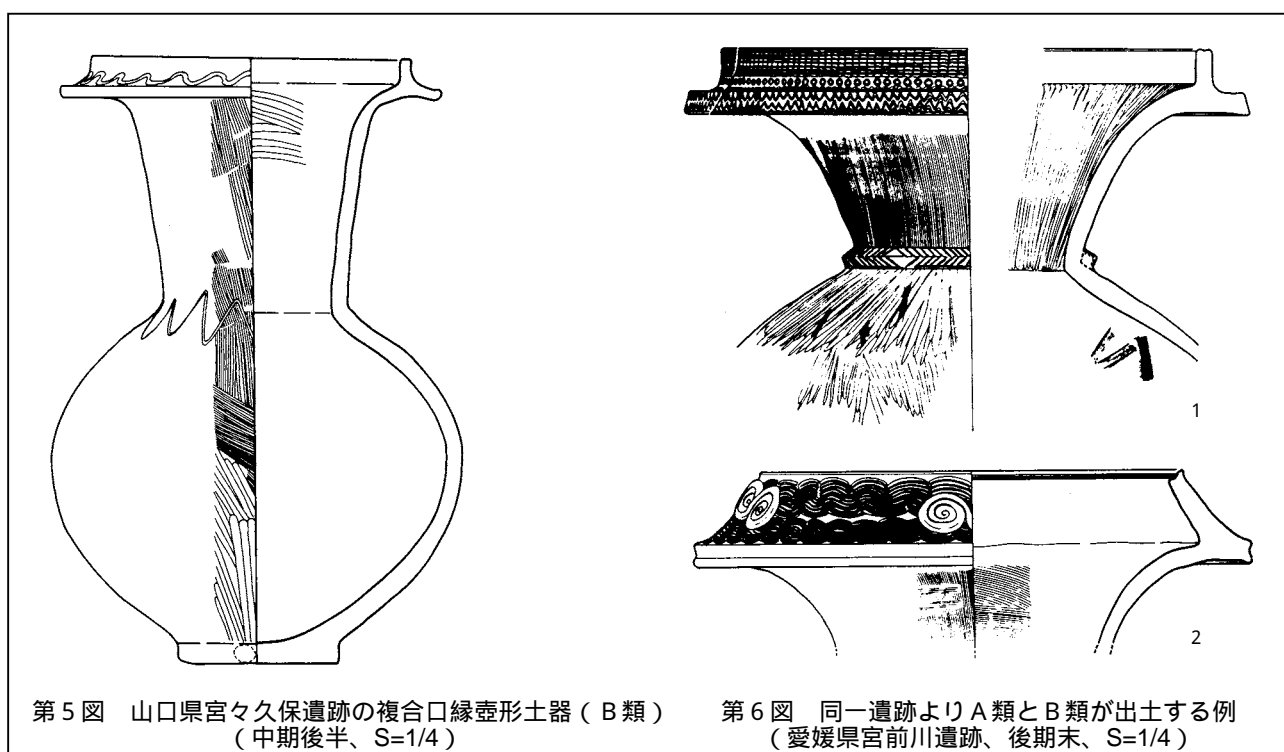
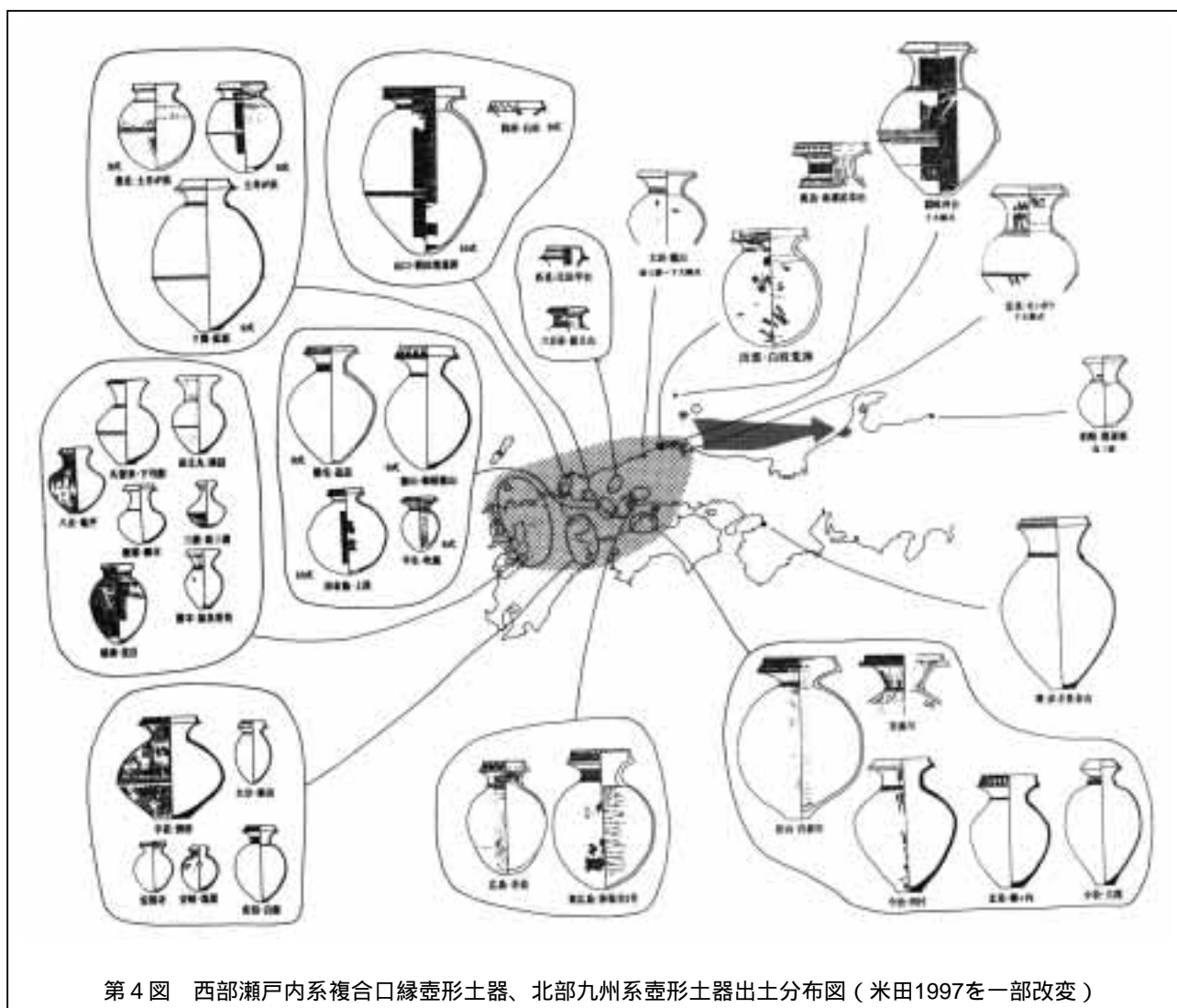
で最後にこれらの問題点について、まず事例の紹介を行い、その後に考え得る解釈を挙げ、今後の課題・展望をはっきりさせておきたい。

第4図は西部瀬戸内系・北部九州系複合口縁壺の分布状況について、島根県出雲市の米田美江子さんがまとめたもの⁽¹¹⁾に一部加筆を行ったものである。これらは全て後期以降に属するものであり、その分布は、A類が北部九州・東部九州・西部瀬戸内に集中、山陰地方に点在し、B類が西部瀬戸内・山陰に点在する。中期に遡る例はここでも紹介されていないが、1点は確実に存在することが新たに明らかになった。第5図はその1点、山口県阿東町宮ヶ久保遺跡出土例である。時期は中期後半であり、本稿のB類に相当する。A類とB類についてはB類が九州に存在しない以外は、基本的に両類で分布に偏りが無いが、A類とB類が揃って出土する遺跡は、管見に触れた限りにおいては、藤江C遺跡例以外は愛媛県松山市宮前川遺跡例（第6図）があるのみである。しかし、基本的には両類で時期的な差や分布状況の差はあまりないものと考えておきたい。時期の問題が解決されるならば、西部瀬戸内系の複合口縁壺は分布状況等から判断して、山陰を越えて日本海ルートでA・B両類（もしくはそれらの土器作りに関わる情報）が同時期に伝わってきたものと判断できる。

最後に時期の問題について触れておきたい。前提として北陸・西部瀬戸内両者の複合口縁壺に関係があるということが必要であるが、西日本においてもA類・B類が共に存在すること、大型容量であること、調整方法が類似すること、中期後半以降北陸（北加賀）において西日本に系譜をもつ土器が増加することなどからこの前提が成り立つ蓋然性が高いと考えている。そこで、考え得る解釈は次の2点に集約できる。まず土器編年自体に誤りがあるという解釈が浮上してくる。これについて戸水B遺跡・藤江C遺跡出土土器やこれらと同時期と考えられる遺跡出土の土器を現在検討しているが⁽¹²⁾、これらの土器は時期が下っても後期前半であり、現在西部瀬戸内で編年されているように後期中葉以降に時期が下ると考えることはできない。北陸同様、西日本においては後期前半の資料が少ないため、複合口縁壺が後期前半に存在する可能性は十分にあると考えることができれば⁽¹³⁾、後期前半で両者が時期的に合致するという考え方が第1点目としてある。第2点目としては、後期中葉以降に西日本において主流となる複合口縁壺の祖型となるものが、中期後半に遡る可能性があるという考え方がある⁽¹⁴⁾。これは現状では北加賀例と宮ヶ久保例の断片的な情報からの判断ではあるが、中期後半に西部瀬戸内から北陸を結ぶ広い範囲に複合口縁壺の祖型となるものが分布していたとみる考え方である。筆者はこの考え方が蓋然性が高いのではないかと理解している。

いずれの考え方を選択するにしても、まだまだ解決して行かなければいけない課題は山積みであり、筆者はまだ考えを固定するつもりはなく、これからも様々な可能性を模索していく必要が有ると感じている。偶然の発見から編年の問題や交流の問題などを考える契機が得られたのは幸いであった。中期後半から後期前半の土器の編年的な問題や交流の具体的な様相については次号以降でも扱って行きたいと考えている。

本稿をなすに当たっては、実に様々な方々からの御教示・御協力を得ました。複合口縁壺については、梅木謙一・柴田昌児・吉田広・森岡秀人・濱田延充・武末純一・吉留秀敏・久住猛雄・中川寧・近藤広・宮腰健司各氏に実物を見ていただき、御教示をいただきました。また、深沢芳樹氏は議論につき合っていただき、御教示を与えて下さったり、関連した資料を送って下さったりと貴重な時間を割いていただきました。田畑直彦氏には図面を送って土器の図を見ていただき、土器と関連文献についての御教示をいただきました。小嶋芳孝・栃木英道・沢田まさ子・久田正弘・中屋克彦・大西顕各氏には資料の取り扱いに便宜を図っていただいたり、御教示をいただいたりしています。今秋に立ち



上げを予定している弥生文化研究会の準備会の席では楠正勝・小西昌志・景山和也・安英樹・安中哲徳各氏に議論につき合っていたり、資料を実見させていただいたりしています。以上の方々の他にも沢山の方々の御教示・御協力をいただきました。文末ながら記してお礼申し上げます。また、本稿に対する御意見や本稿で取り扱った土器についての情報等があれば是非御教示下さいますようお願いします。

脱稿後、本稿に関連したものとして、田崎博之氏の論文の存在を知った。田崎氏によれば、西部瀬戸内では、複合口縁壺は後期初頭に北部九州の高三瀨式土器の影響を受けて出現すること、中期後葉の壺の形状に近似した例があること、ほとんどが大形品であることなどが指摘されている。本稿の内容を考えていく上で興味深い指摘である。

註

- 1) 石川県教育委員会 1975。なお、再実測・トレースは筆者が行った。
- 2) 未公表資料であるが、調査者の小嶋芳孝氏に資料の取り扱いに便宜を図っていただいた。
- 3) 未公表資料であるが、調査者の中屋克彦氏に資料の取り扱いに便宜を図っていただいた。
- 4) 未公表資料であり、調査者の金沢市埋蔵文化財センター小西昌志・景山和也両氏の御厚意により実見する機会を得た。法量に関しては景山氏から御教示を得ている。
- 5) 容量については、実測図をもとに小川貴司氏の考案した1/2法（小川1993）を用いて頸部までの容量（実質容量）計算を行った。
- 6) 第3図1・2・4・5は口径がほぼ同一であり、注目される。
- 7) 河合 忍 1996。
- 8) 前掲7)。
- 9) 本稿では東海・近江に系譜をもつ土器として取り扱っているが、元々の系譜がこれらの地方に辿ることができるという意味であって、同時期の東海・近江地方にこのような土器があることを示しているのではない。筆者はこの時期のこの形式の土器は北陸で独自に変化をしている形式であると理解しており、本来ならば在地系土器という表現が適当であると考えている。
- 10) 山口大学の田畑直彦氏に土器のコピーを送り、見ていただいたところ、時期には問題があるものの、土器自体は山口県周辺の土器と比べても、違和感がないとの御教示を得た。
- 11) 米田美江子 1997。なお、文献については久田正弘氏の御教示を得た。
- 12) 今秋に立ち上げを予定している弥生文化研究会の準備会にて、楠正勝・小西昌志・景山和也・安英樹・安中哲徳氏とともに検討を続けている。戸水B遺跡・藤江C遺跡から出土する土器群は基本的に凹線文系土器が主体を占めるものであって、これらと共伴する外来系土器も中期後半の範疇で捉えられるものが主体を占める。後期前半に時期が下る土器群がある可能性があるものの、主体を占めないことは確実である。また、専光寺養魚場遺跡出土土器は中期後半でも古い特徴をもつ一群であり、後期に時期を下らせて考えることは難しい。
ちなみに、今秋開催予定の弥生文化研究会のテーマは中期後半から後期前半の土器である。興味をお持ちの方は是非参加していただきたい。
- 13) 山口大学の田畑直彦氏から山口県においては後期前半の資料が少ないため、このような可能性も考えられるとの御教示をいただいた。
- 14) 栃木英道氏からも同様の御教示をいただいた。

参考文献

- 石川県教育委員会 1975 『金沢市戸水B遺跡調査報告』
 石川県立埋蔵文化財センター 1997 『金沢市藤江C遺跡』
 金沢市教育委員会 1983 『金沢市西念・南新保遺跡』
 金沢市教育委員会 1988 『金沢市磯部運動公園遺跡』
 金沢市教育委員会 1992 『金沢市専光寺養魚場遺跡』
 金沢市教育委員会 1992 『金沢市西念・南新保遺跡』
 金沢市教育委員会 1995 『金沢市上荒屋遺跡』
 阿東町教育委員会 1998 『宮ヶ久保遺跡』
 愛媛県埋蔵文化財センター 1986 『宮前川遺跡』
 小川貴司 1993 「土器容積の計算法と器体積」 『二十一世紀への考古学』 雄山閣
 河合 忍 1996 「北陸弥生土器様式の変革過程」 『石川考古学研究会々誌』 39 石川考古学研究会
 米田美江子 1997 「一考察」 『白枝荒神遺跡』 出雲市教育委員会
 田崎博之 1995 「瀬戸内における弥生時代社会と交流 土器と鏡を中心として」
 『瀬戸内海地域における交流の展開 古代王権と交流6』 名著出版

第1表 西部瀬戸内に系譜をもつ複合口縁壺形土器一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	器種	口径cm	頸部径cm	胴部径cm	底部径cm	器高cm	容量ℓ
1	戸水B	金沢市戸水町	2号土坑・3号溝	中期後半	壺	20.8					
2	藤江C	金沢市藤江北	河跡(第2層)	中期後半	壺	20.8					
3	戸水B	金沢市戸水町	35号P	中期後半	壺	17					
4	専光寺養魚場	金沢市専光寺町	SD02	中期後半	壺	21	16.7				
5	藤江C	金沢市藤江北	河跡	中期後半	壺	20.8					
6	上安原	金沢市上安原町		中期後半	壺	23.2	15.4	36.7	10.6	60.7	24.6

第2表 東海・近江に系譜をもつ複合口縁壺形土器一覧表

番号	遺跡名	所在地	遺構名	時期	器種	口径cm	頸部径cm	胴部径cm	底部径cm	器高cm	容量ℓ
1	磯部運動公園	金沢市磯部町	10号土坑	中期後半	壺	10.5					
2	磯部運動公園	金沢市磯部町	10号土坑	中期後半	壺	18.2					
3	専光寺養魚場	金沢市専光寺町	SK01	中期後半	壺	14.9					
4	西念・南新保	金沢市西念町他	L区SK01	中期後半	壺	21.3	13.5				
5	西念・南新保	金沢市西念町他	G-4区P-215	中期後半	壺	17.4	10				
6	上荒屋	金沢市上荒屋町	SK113	中期後半	壺	13.8	9.3				